

## [教育方法一般]

## 書く力の育成を目指した学習指導改善の試み

猪又千恵子\*

## 1 主題設定の理由

現代社会は、国際化・情報化の進展により急速に変化している。それに伴い情報を的確に活用し、国際社会をリードすることのできる人材の育成が求められている。このような状況の中、教育現場における国際的な指標の一つとして、OECDによるPISA調査が2000年度実施された。OECDが目指している学力は、「知識や能力、経験を実生活の場面でいかに活用できるか」である。ところが、2003年度調査、2006年度調査での日本の結果は、読解力の落ち込みが激しく、これが大きく問題視されるようになった。

こうした社会情勢を受け、平成23年度から全面実施される新学習指導要領では、その改訂の基本的な考え方として「基礎的・基本的な知識・技能の習得」「思考力、判断力、表現力等の育成」が強調されることになった。また、教育内容に関する主な改善事項の筆頭に「言語活動の充実」が示された。

そこで、平成19年度には、数十年ぶりに全国学力・学習状況調査（以降、全国調査）が実施された。また、「考える力」の育成を目指し、新潟県小学校教育研究会では、学習指導改善調査（以降、県改善調査）を実施している。これらの調査は、知識基盤社会で求められる確かな学力の習得と活用に向けた学習指導の改善を期して取り組まれたものである。教育現場には、これらの調査結果を真摯に受け止め、自校の学力課題の解決に向けた学習指導改善への取組を着実に進めていくことが強く求められている。

当校児童の学力実態とは言えば、県や国の傾向と同様に、記号式設問は解答できるが記述式設問に対しては未記入が多いという問題が顕在化した。これは、情報や事象を言葉で理解し、知識や経験に照らして考え、自分の考えをまとめて発信する機会の不足の結果と捉える。

社会の国際化・情報化は、今後益々進展するであろう。その社会を生きていく人間に求められるのは、情報に流されることなく、根拠に基づいた自分の考えをしっかりともち、発信できる力であり、自分なりの価値観を大事にしながらも他者と共生していくことのできる豊かな心をもった人材である。

以上のような社会的背景のもと、当校では、言語活動の中核をなす国語科の学習指導を中心に学校教育活動全体を見直し、改善に取り組むこととした。

## 2 研究の目的

本研究では、県改善調査等の結果から当校の学力課題を洗い出し、授業実践を通して課題解決に向けた学習指導改善の方策を見出していくことを目的とする。

## 3 研究の方法

(1) 客観的データに基づく学力課題の洗い出し

〈データ〉 平成19年度全国学力・学習状況調査の結果と分析

平成19年度新潟県小学校教育研究会による学習指導改善調査の結果と分析 他

(2) 授業研究による国語科「書くこと」領域での学習過程の工夫

必要な情報を求める過程→自分の考えをもつ過程→考えを比べる過程→考えを伝える過程

(3) 授業実践における児童の姿や作品をととした学習指導改善の方法や内容の検討

\* 上越市立国府小学校

目指す児童の姿の明確化  
短期P D C Aサイクルによる見取りと学習過程の修正

4 実践の概要

(1) 学力課題の明確化と研究主題の設定

平成19年度実施の全国調査と県改善調査の結果、及び洗い出された学力課題は次のとおりである。

【平成19年度全国学力・学習状況調査結果】

	全国(公立)	新潟県(公立)	国府小学校
A問題	81.7	82.8	85.0
B問題	62.0	64.0	65.0

△全国調査では、設問ごとの分析から、A問題では、「メモやインタビューの工夫」「物語文を叙述に即して読む」、またB問題では、「情報の中から必要な事項を取り出す」「資料を関連付けて読む」の正答率が低かった。

※太字は、県より劣る結果が出た内容とその数値

【平成19年度新潟県学習指導改善調査結果】

4年生	資料分析				記述問題			
	読取	中心	資料分析	資料活用	文字数	構成	資料選択	資料活用
新潟県	64.0	32.4	68.4	37.7	88.1	56.9	52.2	42.1
国府小	74.0	55.0	72.0	62.0	78.0	54.0	39.0	35.0

5年生	資料分析				記述問題			
	資料選択	内容分析	文字数	段落	立場	資料活用	根拠	効果的表現
新潟県	64.0	32.4	84.9	55.6	53.5	34.0	34.0	24.3
国府小	74.0	55.0	91.5	54.5	43.5	67.5	42.0	12.5

6年生	資料分析				記述問題			
	資料選択	内容分析	文字数	段落	立場	数値	短所	根拠
新潟県	52.2	85.3	86.7	55.0	74.7	42.9	53.7	51.4
国府小	49.0	78.5	94.5	72.5	82.0	31.5	54.5	28.5

《洗い出された課題》

△「資料選択」「内容分析」が、県平均を下回る傾向にある。資料や他者の考えをもとに自分の考えを深めようとする思考過程を大切にしたい指導が課題となる。  
△記述問題では、4年生「文字数」「資料選択、活用」、5年生「立場」「効果的な表現」、6年生「数値を取り入れる」「根拠を明確にする」という項目で県平均を下回っている。効果的な記述の仕方の指導が課題となる。

上記の課題の解決をとおして目指す児童の姿を次のように設定する。

- 自分の考えの根拠となる情報、既習の知識や経験などをもとに自分の考えをもつ
- 資料や他者の考えをもとに、自分の考えをさらに深めようとする
- 自分の考えが伝わるように、効果的に文章表現できる

このような姿を実現するためには、自分の考えを文や文章に書き表すことが有効である。なぜならば、「話すこと、聞くこと」に対して「書くこと」は、視覚化により言葉を吟味し内容や構成をじっくりと練ることができるからである。ごまかしのきかない書き言葉は、より深く考えようとする態度を養うと考えた。

そこで、学力課題の解決に向けての研究主題を、次のように設定して取り組むこととした。

研究主題；情報を活用し、説得力のある文章を書く力の育成を目指して

(2) 1年目の取組

① 構造図の作成

全校体制で取り組むに当たり、授業作りのイメージの共通理解を図るために、単元の流れや1単位時間の学習活動の過程を構造図に表すこととした。各学年の授業実践はこの過程をたどることを前提とする。実践をとおして、児童の思考の流れや教師のはたらきかけに不具合があれば修正していく。

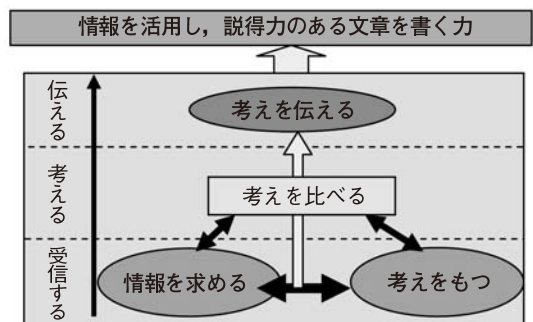


図1 授業のイメージ化を図るための構造図I

② 授業研究 ～1年目の1学期～

研究主題に基づいた取組の開始にあたり、学年部で1～2実践の授業研究を計画した。まず、教科書単元から「書く」活動を位置付けることが可能な単元を選び出した。次いで、構造図に示した過程をたどる指導案を作成した。1年目1学期実践の授業は以下のとおりである。

学年	単元名	使用した資料, 提示方法等	書く場面
4年	4年1組から発信します	総合(環境学習)との関連*総合ファイル	「はじめ一中1一中2一終わり」の段落構成
1年	てがみをかこう	生活科の飼育活動との関連 *写真 *生活科ファイル	飼い主にヤギの様子を知らせる手紙文
3年	道案内をしよう	教科書教材の絵地図 *電子情報ボードでの一括提示	現在地から目的地までの道順を説明するメモ
6年	討論会をしよう	教科書で取り上げているテーマ *説明に必要な資料	自分の立場と理由の短冊, 討論後の意見文

【授業実践～1学期の振り返り】

- 手紙文, 報告文, 意見文等の表現の型の指導により, 必要な内容を書き切ることができるようになった。
- 体験に基づいた単元構想では, 書く目的の明確化と豊富な材料により書くことへの意欲化が図られた。
- 国語科における基礎的・基本的な知識・技能を明確にし, 指導法を工夫する必要がある。

《実践例1;平成20年度1年生の実践》

生活科「ヤギさんとなかよし」:ヤギの飼育活動と関連付け, 国語の時間には手紙文を書く学習を行った。

<p>教師が提示した内容不十分な手紙文</p> <p>○○さんへ おげんきですか。 やぎは, げんきです。△△より</p>	<p>→</p>	<p>《児童の反応》</p> <p>ヤギの様子が伝わらない。もっとくわしく知らせたい。</p>
<p>○○さんへ おげんきですか。みんなやぎをかわいがってせわをしています。(中略) やぎは, たったり, はしったり, ないたり, なめたりします。ずぼんをなめられたりしておもしろいです。</p>		

③ 構造図の修正

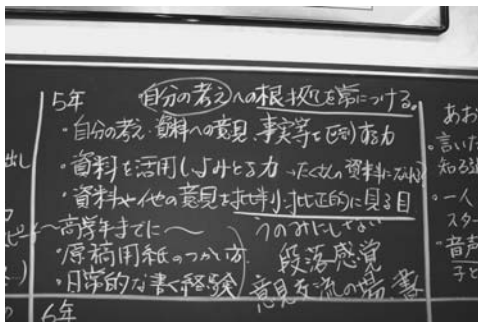
1学期実践に基づく学習指導改善の視点は次の2点である。

- 各教科等における豊かな体験活動と関連付けて, 国語科の「書くこと」の単元を構想すること
- 各学年で身に付けるべき基礎的・基本的な知識・技能をきちんと指導し, 習得を図ること

以上の視点を「情報を活用し, 説得力のある文章を書く」言語活動を支えるものとして構造図の土台に据え, 2学期実践に取り組むことにした。

【国語科の基礎的・基本的な知識・技能の明確化】

国や県の学力調査結果の分析や検討をとおして, 低学年からの確実な指導の積み上げが必須であることが改めて確認された。そこで, 全教員で各学力調査問題を解き, 担当学年の指導事項の関連性を話し合う場を設けた。次の写真はその一部であり, これをもとに1～6年生の「書くこと」に関する内容の国府小学校版系統表を作成した。



資料1 学年の指導内容の検討

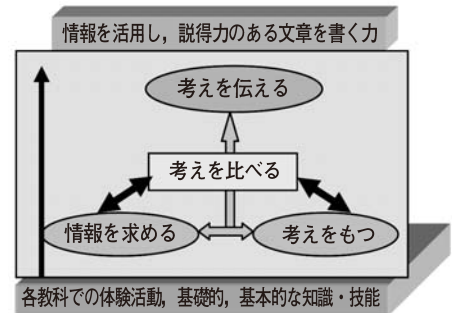


図2 単元構想のイメージ化を図るための構造図

	1・2年生	3・4年生	5・6年生
体験活動	生活科, 総合的な学習の時間, その他の教科 教師によるコーディネート 伝えたいことを考える場の設定		
情報の選択・活用	目的意識, 相手意識の明確化 資料に基づき振り返り開始 市販の付箋を利用した情報の取出し(1文1内容) マスの目なし マスの目なし 付箋の色分けによる情報の分類, 比較 文章の構成を考える際, 付箋の並べ替え 付箋と付箋の関係付け(矢印, 接続語, 言葉の付け足しなど) キーワード, キーセンテンス 前後書き 目的に応じた用紙の選択 サイドラインを使った読み取り(色分け) 記号化した読み取り		
書く	ひらがな かな 部首, 長音 句読点 かぎ 等 主述の関係 原稿用紙 読み返す習慣	はじめ一中一終 わりの段落構成 全体と全体 メモを文にする 引用の仕方 1文 ⇄ 2文 接続語と接続語 指示語と接続語 小見出し付け 問いかけ, 比較, 強調 比較, 例置法	文章構成の工夫 (縦括型, 尾括型, 双括型) 立場と理由, 依頼 知識と体験 問題点を生かした主張 対立意見の比較
表現様式	手紙文, 記録文, 説明文, 紹介文, 物語文, 報告文, 手紙文(依頼状, 案内状, 礼状), 意見文 <低学年> 効果的な自由な文章表現 <高学年>		
意見交流	書いたものよいところを見て つけて感想を伝え合う。 書き手の考えの明確さ, 巧みに 着目して意見を述べ合う。 表現の方法, 効果に着目して 助言し合う。 発達段階, 交流内容に適切なグループの規模の検討 交流する段階(情報選択, 書く内容の検討, 清書前の推敲, 単元の最後) ・ 自他の考えを比較, 検討する。 ・ 友だちの意見を広く求める		

資料2 国府小学校版『書く力の育成』学年系統一覧表

【各教科等における豊かな体験活動の計画】

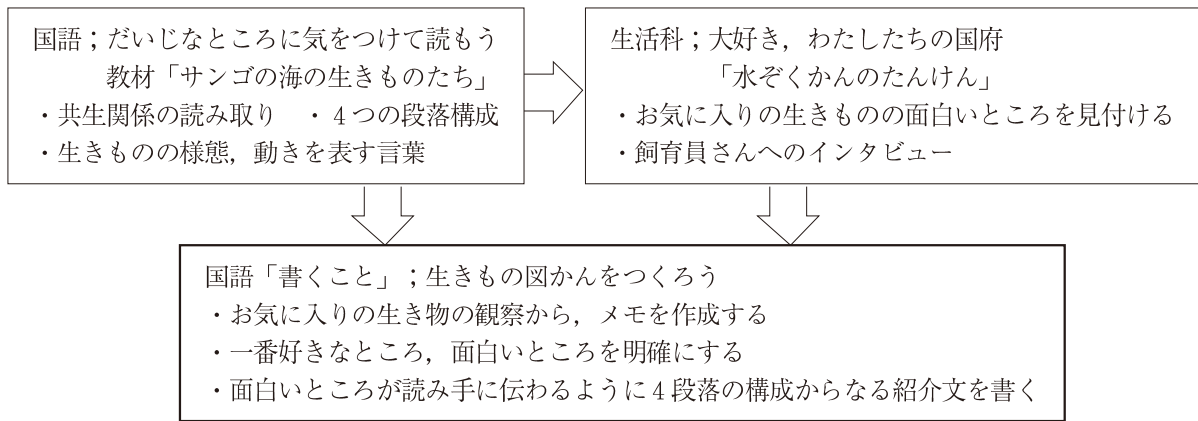
「書くこと」の目的意識や相手意識を明確にして、意欲に支えられた学習活動にするために、国語科の単元を各教科等の豊かな体験活動と関連付けた単元構想をすすめることにした。そこで、生活科、総合的な学習の時間の年間指導計画の見直しを行った。

④ 授業研究 ～1年目2学期～

豊かな体験活動と関連付けることにより、活用する情報は各教科等での学習のポートフォリオ（図、グラフ、表、文章、体験そのもの 等）が主となった。

《実践例2；平成20年度2年生の実践》

2年生での説得力のある文章を、「生活科の体験をとおして、気付いたことや発見したことが相手に伝わるように書かれた文章」と捉えた。



【学習の実際；「必要な情報を集める」段階を経て、段落構成の整った文章に書き表す】

生活科の水族館探検の振り返りシートから、「見たこと、調べたこと」、「インタビューをして分かったこと」、「思ったこと、感想」の3つに分類し、3色の付箋に色分けして書いた。それをもとに「はじめ-中1-中2-おわり」の段落構成表（写真1）に貼り、文章（写真2）に書き表した。

この過程をたどることにより、すべての児童が生活科での気付きの中から情報を精選し、段落構成の整った文章を書くことができた。一枚の付箋に一内容を書くこと、付箋の色により段落構成表に分類して貼ること、伝えたいことを自分に問いながら精選すること、段落を意識して書くこと等に習熟していった。

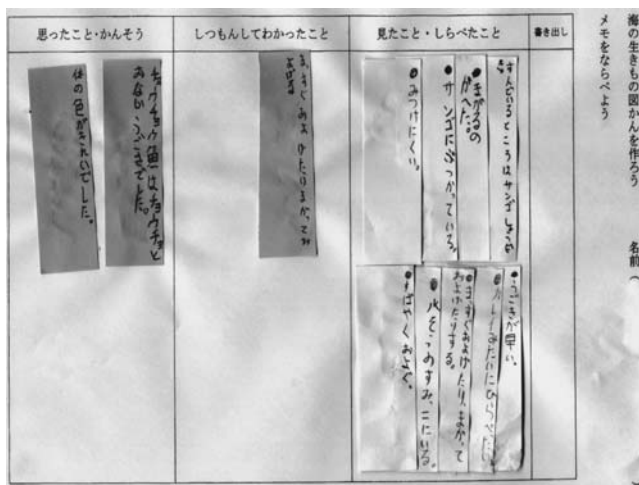


写真1 付箋を整理した段落構成表

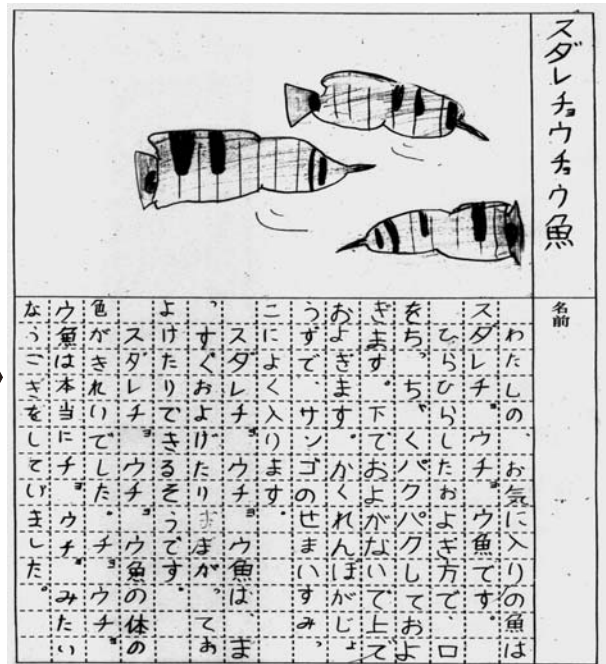


写真2 段落構成表をもとに書いた作品

### ⑤ 1年目の取組の振り返り 成果（○）と課題（●）

- 国語科「書くこと」の基礎的・基本的な知識・技能を学年ごとに確認し授業実践に取り入れることができた。
- 豊かな体験活動との関連を図った単元構想により、生活科、総合的な学習の時間がより充実した。
- 付箋での情報の取り出し（情報選択）と段落構成表を使った情報の分類・整理が、児童の思考を促し、文章表現に生かされることを確認できた。
- 個人が思いや考えをもつことは確認できたが、意見交流による思考の深まりが確認できていない。

### (3) 2年目の取組

1年目は、構造図に示す学習過程に合わせて授業を創ることにより、一人一人の思いや考えを明確にすることができるということを確認した。しかし、自分が思考・判断したことに基づいて他者と意見交流できるところまでには至らなかった。そこで、2年目は自分の考えを深めるための意見交流場面をつくり出し、それを文章表現に生かしていくという実践に取り組むため、研究主題を次のように設定した。

研究主題；情報を活用し、説得力のある文章を書く力の育成を目指して  
～情報を選択し、自分の考えを深める指導の工夫～

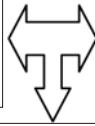
#### ① 授業研究

2年目の学習指導改善の取組の重点は、各自の考えを深めるための意見交流場面を作り出すこと、及び目的に応じたグループの規模や編成に対する検討を行うこととした。

実践例3；平成21年度6年生の実践

#### 図工；「新発売！流木TOY」

- ・学校裏手の海岸で拾った流木でのおもちゃ作り（対象年齢、遊び方、注意事項を念頭に）



#### 総合；「流木TOY博 in 歴史の里会館」

- ・地域の交流施設で、流木の展示会を開催する。
- ・来館者は、実際におもちゃで遊ぶことができる。

#### 国語；「おもちゃの魅力を伝えよう」

- ・図工の時間に作成した流木TOYを交流施設に展示する。来館者におもちゃをPRし、遊び方を伝えるための解説書を書き、内容が相手に伝わりやすいかどうかをグループごとに検討するための意見交流の場を設定する。

この学習活動は、1年次研究から大切にしてきた「相手意識、目的意識」に基づき、相手が理解できるか、読んだ人が遊びたいと思うかを意見交流の視点とした。

この意見交流グループの規模は4人程度とし、作品を囲み、作品と解説文を見比べながら話す雰囲気を大切にしたい。



写真3 作品を示しながら意見を交わす

#### 【意見交流場面での児童の言葉】

- A；5歳くらいの子どもに伝えるんだったら、「～してみよう」というように書いた方が、いいんじゃない？
- B；「～してください」だと、なんかかたくるしく感じるね。
- C；遊び方の絵とか写真も載せておいた方がいいよ。自分がそこにいるとは限らないから。

### ② 2年目の取組の振り返り 成果（○）と課題（●）

- 1年目からの継続で、国語科「書くこと」と各教科等との関連付けがより進んだ。それに伴い、目的意識や相手意識をもち、相手に伝わる文章を書くための意欲や知識・技能の向上が見られた。
- 一連の学習活動に、意見交流を必要とする場を設定した実践が積み重ねられた。その中で、グループの質や適正規模への配慮がなされた。
- 意見交流により、自分の考えが深まったとの自覚を生み出す手立てが不十分であった。意見交流が有効だとの自覚がより活発な意見交流につながる。今後は、振り返りシートの活用などを日常化していく。

## 5 取組の成果と考察

当校での2年間の取組を、県改善調査の結果の推移から見る。

### 【県改善調査からみた学力実態の推移（平成19年度の3年生）】

平成20年度 4年生	資料分析				記述問題			
	読取	理由	段落	書き直し	文字数	構成	資料収集	資料活用
新潟県	67.3	46.3	47.2	32.8	75.0	51.0	60.2	49.0
国府小	87.2	47.3	73.2	73.2	77.9	82.4	57.8	75.6

平成21年度 5年生	内容分析				記述問題						
	資料選択	資料選択	資料選択	文字数	段落	立場	資料活用	資料活用	根拠	数値	
新潟県	55.8	83.1	61.8	85.7	47.4	55.2	61.6	57.5	57.6	27.6	
国府小	74.4	96.6	72.2	94.1	89.4	79.0	84.8	87.2	76.6	36.0	

平成22年度 6年生	資料分析				記述問題				
	図の読取	資料読取	資料読取	グラフ読取	文字数	段落	意見	効果的表現	根拠
新潟県	59.3	91.7	80.7	87.0	83.0	45.3	44.4	45.8	55.0
国府小	72.7	100	89.3	98.7	95.0	80.7	60.3	57.0	63.0

この結果から、次のことが読み取れる。

○平成19年度調査で県平均を下回っていた項目が、県平均を確実に上回っている。

○「時間内に指定字数の文章を書く」「段落を意識して書く」のような技能は、短期に成果が表れた。

○「資料の収集、選択、分析、活用」に関わる読取や記述では、取組初年度では通過率が県平均を下回る項目があるものの、上昇傾向が確認できる。

各教科等における体験活動との関連付けを図り、国語科としての知識・技能の習得と活用を促す学習指導改善に取り組んできた。県改善調査の結果に基づく2年間の取組の成果として次の3点が挙げられる。

- (1) 文章を書こうとすることにより、情報をもとに思考・判断して自分の考えを明確にする姿、自分の思いや考えを目的や相手に応じて表現しようとする姿を確認することができた。
- (2) 各学年の学習内容の系統性を意識した学習指導改善が全校体制で行われるようになった。
- (3) 国語科「書くこと」を中心とした学習指導改善への取組が、各教科等との関連付けの必要を生み出し、学年ごとの主体的な教育課程の編成につながった。

国語科で目的に沿った表現様式を指導することは、その様式に沿った思考につながる。実体験を伴い、目的意識・相手意識に支えられた文章表現は、児童の主体的な思考・判断を促す。また文や文章で表現することにより、表現の効果等についての吟味が可能になる。当校児童の学力課題解決のための学習指導改善の取組は、結果的には地域に根ざした教育課程の編成にもつながったのである。

## 6 今後の課題

国語科という一教科の、しかも「書くこと」に限定して取り組み始めた学習指導の改善であった。それが、途中からは、相手意識や目的意識を明確にするために、書くための生きた教材を求めて各教科等との関連を図ることとなった。本研究では、他教科等での学習を国語科に引き寄せて文章表現の学習を行った。しかし、新学習指導要領の全面実施に当たっては、国語科で身に付けた知識・技能に基づき、各教科等の目標達成のために言語活動の充実をいかに図るかが求められている。教育課程全体を鳥の目で俯瞰しながら、「書くこと」「読むこと」「聞くこと・話すこと」のバランスを考慮した活用場面を作り出すことが課題である。

### 〈参考文献〉

- 井上一郎 「国語科における言葉の重視と体験の充実」『初等教育資料NO. 823』文部科学省 2007年  
「平成19年度全国学力・学習状況調査」国立教育政策研究所教育課程研究センター 2008年  
高木展郎 「PISA型『読解力』で求められているもの」『学力ジャーナル[2号]』学習研究社、2008年  
鶴田清司 「PISA型読解力をどう育てるか」財団法人学校教育研究所編『教育時評No.12』 2007年